

所望の刀を不入く悦び限りはとりの。正猶感下る面を以て
 いりあも早速方渺よりけり。我撥滴の傘らの青ふを奪つれ
 刀の守りに論断ありた。賢くも取つるもの多感するみ程餘り
 あり。今の既愉快附與まぐ。と了得又智勇の正務も為せ
 冷徹して感佩る。熱く日吉が器量と慮ふふ年僅ふ十三
 にあり。那許務まき智略を役け。大丈夫を以て警感せしむ
 う不思議の挙止。是凡生の見みあわじと。未恃りくを志
 一。愈親しく交情を以て。明日天文十八年日吉丸の他念
 あく。蜂須賀の家より年を超て十四歳とど長にける。霞
 風雪霜二回り。居然を以て後るといふも。遠もあぬ中村
 まで。母公の愛も知しめさず。日吉が緯の三瞬息もとれぬ

思ふく忘れねむ。寧暖胞飢の時につけ。妻見の奈何と遷
 つる春よのなれど被くべき。夜の垢もや泥つらん。頼まれ指し
 色懶放りて。寐眠又悩とやせん。只それのそふ他はよと度なる
 して患若や做つらん。乞丐見さどふ勾引やせん歎。那まれ
 這まれ素く。速く故郷へ帰せり。咳款見よ慕しや
 と夫婦と解と愛若の泪の年の南と。時を嫁りて為者
 明らうとれ

日吉丸一遍還故郷中村附求食老婆

靈泉の音も傳ふく清冷賢人の用ゆるに信せし智現
 小日吉丸の長る就て智慮はさうして痛が如く既此年也
 天文十九年と云ふりけし神童長て十五歳熱田の宮人